ゴブリンの孕み袋になる乳ヒロ。
「ここがゴブリンの巣穴、か……」
一人でそこを訪れたのは
いかなる気まぐれからだったか。
聖槍も持たず、供も連れず、
王は一人、下等な魔物の巣に向かった。
ガサ
ガサ
草むらの陰から、岩の隙間から……
じっと警戒の視線が注がれる。
「そう警戒せずとも、こちらは丸腰です」
王の言葉の調子は柔らかかった。

「ほら、大丈夫でしょう？」

手を広げて害意がないことを
ゴブリンたちに伝える。

こちらの意図が伝わったかは
わからないが、少なくとも
危険はないと判断したようだ。

下等な魔物たちは、
ソロソロとねぐらから出てきた。

クス…♥

ゆさっ♥

ゾロ

ゾロ

「鎧も外しましょうか」

身を包む鎧も外していく。
もっとも、王と下等な魔物では、
たとえ裸でも相手にすらならない。

王にとって何も危険はなかった。

ふふ…♡
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
ゴブリンたちは雌の匂いに
特別に敏感な鼻を持っている。
雌が発情したニオイを嗅ぎ取ると、
たとえ相手が人間であっても
彼らの生殖本能が刺激されるのだ。
「んっ……ふふ、伝わりましたかね」
まとわりつくゴブリンたちに、
王は笑みをこぼす。
そう……この巣穴に来た理由は、
自ら、下等な魔物の
慰み者になるためだった。

はっ
はっ
「ほら、わかるでしょう？」
王は四つん這いになり、ゴブリンたちに
向かって尻を突き出して見せる。
スンスンと鼻を鳴らして、王の
股の匂いを嗅ぐゴブリンたち。
みるみるうちに、その股間が勃起する。
その様子に、王もまた興奮を
抑えきれないように、尻を振り誘惑する。
フリ♡ フリ♡
ゆさっ♡
すわ…♡
これから小鬼たちに犯される。
その事実が、王の中で酷く甘美な
もののように感じられた。
「布が邪魔ですね……」
王は服をはだけた。

はっ♡
はっ♡
もはやゴブリンたちに警戒の
様子はない。ただ生殖本能のまま、
雌に群がってくるのみだ。
王はなおも挑発するように尻を振る。
秘所の割れ目から愛液をたらしながら。
ゾクゾク
ぱぷり♡
ゆさっ♡
ぱぷり♡
トロ…♡
「一番槍は貴方ですか」
ゴブリンの一匹が、とびかかる様に
王の大きな尻に抱き着き、硬く勃起した
生殖器を押し当てる。
交尾が始まった。

ガク ガク
「くふぅ……っ❤　こ、これは……！」
その小柄な体躯からは想像もつかないほど
ゴブリンの交尾は激しく、逞しかった。
王は全身を走る快感にしびれる。
「ううっ……❤　よ、良いです❤」
ゾク ゾク
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぐちゅっ ぐちゅっ ぐちゅっ
嬌声をあげる王の言葉などお構いなしに、
ゴブリンたちは勝手な交尾を続ける。
そのがむしゃらな行為が、余計に
王の身体に熱をともしていく。
「い、息抜きのつもりでしたがっ……」
駆け上がってくる快感に、もはや絶頂を
抑えることはできなかった。
ゴブリンの巣穴の中で、王ははしたなく
絶頂し、愛液をまき散らした。

何度、交尾を繰り返しただろうか。
何しろ、ゴブリンたちは大勢いて、
しかもそれぞれが絶倫なのだ……。

「も、戻らなくては、いけませんね……」

立ち上がる足に力は入らない。
だが、気力を振り絞り、王は身を起こした。

なおもまとわりつく小鬼たち。

「また……来ますから……ね……？」

やさしい声で、そう約束した自分の言葉に、
王は驚いていた。
自分の中に決定的な何かが刻まれたことを
王は自覚した。

先に待つのは破滅か、それとも幸福か……。

それから、幾たびも同じことが
繰り返された。
ゴブリンの巣穴を訪れては、
彼らの欲望に王は身を任せる。

鎧を脱ぐ時間も惜しみ、
最初から軽装で訪れることもあった。

そうするうちに、王の中では
一つの感情が膨らみつつあった。
王として、いや人としてあるまじき、
口に出すのもおぞましい感情……。

ゴブリンの子を孕みたい――。

今や、王の心はその一念によって
占められていた……。

そして、ついにその日が来た。
王は森の途中に鎧を捨て、
さらには服も脱ぎ捨て、裸になる。
もう自分には必要ない。
ゴブリンの巣穴に急ぐ。
「……今日はお願いがあって来ました」
すっかり警戒心なく、穴から出てくる
小鬼たちに、王は声をかける。
は——っ
は——っ
「あなたたちの群れに加えてください」
王の言葉は理解されていないだろう。
ゴブリンたちはただ目の前の雌の身体に
むらがっているだけだ。
だが、王はそれでも満足そうに頷くと、
ゴブリンを抱き上げる。
とろ…

「貴方はいつも真っ先に来てくれますね」

王が来ると必ず交尾にくる個体だった。
長く観察していると、ゴブリンたちにも
個性があることがわかってくる。

「私が気に入りましたか？」

王はそう言うと、愛おしそうにその小鬼と
口づけをかわす。
ちゅっ、ちゅっという音が洞穴に響く。

他のゴブリンたちもチンポを立たせて、
王の身体にこすりつける。
まるで、交尾の予約をするかのようだ。
王は頷き、洞窟の奥に入っていった。

「好きなだけしていいのですよ」

洞窟の暗がりの中で、王は尻を突き出し
ゴブリンを誘惑する。
これまでは、時間を気にした交尾だった。
しかし、これからは違う……。
昼夜、飽くことなく犯され続けるだろう。

そして、それこそが王の望みだった。
ゴブリンたちの、雌になること……。

普段よりひときわ強く、
発情した雌のニオイを股から発している。

先ほどのゴブリンの個体が、王の股の
割れ目を舐めながら、ペニスを硬くする。

「欲しいのです。貴方の子種が……」

王は胸の高鳴りとともに、小鬼の
挿入を待った。

あっ
あんっ
はっ
ゴブリンは猛然と尻に抱き着くと、
小さな体躯に似合わぬ大きな生殖器を、
王の秘所の割れ目に突きこんだ。
そのまま、がむしゃらに腰を振る。
「はぁんっ……❤　やん❤」
甘え、媚び、あるいは、愛情か。
とろけた声が王の喉から漏れる。
王の柔らかい体に小鬼は夢中だ。
はんっ
はんっ
はんっ
はんっ
ずっ
ずっ
ずちゃっ
「上手です、とっても良いですよ❤」
王は自分を犯すゴブリンに愛おしい視線を
注ぎながら、ゴブリンを優しく励ます。
おそらくは一方通行の愛情だろう。
だが、たしかに王の心は満たされていた。
「ください、貴方の精子をっ……❤」
王は小鬼に甘え、おねだりした。

ビクッ♥ビクッ♥
小鬼の腰が何度も尻に叩きつけられる。
そのたびに、快感が波となって、
王の背中を走り、脳髄を満たしていく。
これまでに経験したことのない、
強烈な快感が、まるで光のように、
王の意識を貫き、焼き尽くす。
「おっ、おおおおおっ！！❤」
気づけば、王は咆哮をあげていた。
ぴゅっ♥
ぴゅっ♥
ぴゅっ♥
ぞくっ♥
ぞくっ♥
その声に合わせるように、
ゴブリンも激しく射精をした。
ゴブリンのねばつく精液が、
王の膣口から一気に流し込まれていく。
「あっ……❤　あっ❤　はぁっ❤」
絶頂の余韻も冷めやらぬうちに、
すぐに次のゴブリンが、自分の一物を
王の割れ目に突きいれた。

風評に反して、異種族であるゴブリンと
人間では妊娠の確率はそう高くはない。
ゴブリンに捕まった乙女が孕まされるのは、
四六時中犯され続けるからだ。

「ちゃんと孕めるでしょうか……」

王は優しく傍らのゴブリンの頭を撫でた。
もっとも、孕むまで交尾すればいいだけだ。

時間ならいくらでもある。

「おや、貴方は……？」

股を広げる王の前に歩み出たのは、
今までは洞窟の奥に隠れていた個体だった。
臆病なのか、慎重なのか。
それとも照れ屋なのか……。

ようやく警戒を解いたということか。
王は微笑み、割れ目を大きく広げる。

「大丈夫、あなたの番ですよ。」

「んっ……❤　ふうっ……！」

奥手なゴブリンは、今まであまり交尾に
ありついたことがなかったのかもしれない。
ペニスを王の秘所にあてがうと、
夢中で腰を動かし始めた。

「そうっ……❤　上手ですよっ……❤」

ぞくぞくぞく

「おほおおっ❤」
何度も何度も、繰り返し精液を注がれ、
王は何度も絶頂する。
身体はゴブリンとの交尾を受け入れ、
ねっとりした欲望と快感を覚えこんでいく。
強烈な多幸感が王の全身を満たしていく。
ぴゅっ
ぴゅっ
洞窟のすべてのゴブリンたちが
満足するまで犯され続け、どれほど
時間が経っただろうか……。
「少し……休憩ですね……❤」
全身をゴブリンの精液に満たされて、
王はやっと満足感と安心感を覚えた。

身を起こすと、ゴブリンたちが
抱き着いて、王の身体を舐める。
いつもの個体は、首に手を回し、
顔と顔を近づけてきた。
「どこにも行きませんよ……❤」
はっ♡
はっ♡
はっ♡
ぎゅん♡
ぎゅん♡
ゴブリンの頭を撫で、恋人のように
優しく唇をついばみ、舌を絡ませる。
その時、下腹部に温かな感覚が走った。
「あっ……❤　今……受精した……❤」
妄想、錯覚かもしれない。
だが、王は自分の身体の奥、子宮の中で
自分の卵子とゴブリンの精子が結びつくのを
確かに感じた。

はたして、その直感の通りだったのか……。
数か月後、王の腹部は大きく膨らんでいた。
どの個体の子供かはわからない。
だが王にとっては別に構わなかった。
これから、何人でも生むつもりだから。

孕んでからも、ゴブリンたちとの
交尾は絶えることなく繰り返された。
大きくなった乳房からは、すでに母乳が垂れ、
ゴブリンたちはそれを好んで飲んだ。

「子供の分も残してあげてくださいね……❤」

お腹を撫でながら、王はゴブリンたちに
自分の母乳を与える。一匹が、口に含んだ母乳を
王に口移しに飲ませてくる。

王は微笑みながら、ゴブリンの口に吸い付いた。

ゴブリンたちは、彼女を女王蟻のように扱っていた。
食事や身体の世話をして、代わりに交尾という
報酬を受け取るのだ。

「さあ、今日もどうぞ……❤」

大きなお腹が地面に触れないように気を付けながら、
王はゴブリンたちに向かって尻を突き出す。
すっかり熟れた女性器が、雌の匂いを振りまいた。

「今日も貴方が一番ですね……❤」

いつもの個体が真っ先に王の股に口づけをした。
群れの中でも王の身体にひときわ執着している。

「貴方がこのお腹の子の父親なのですか……？」

優しく王は問いかけるが、言葉は伝わらないのだろう。
ゴブリンは王の問いかけに答えず、勃起したペニスを
王の女性器にねじ込んだ。

「ふぅんっ……❤　はぁっ……❤」

実際、判別する方法もないのだろう。

まあ、群れのどの個体の子供だろうと、結局は
どうでもいいことだった。

「あっ❤　あっん❤　あっ❤」

何度も繰り返されたゴブリンとの交尾に、
王は今日も甘いあえぎ声をあげる。

魔物に求められ、ただ交尾のために日々を過ごす。
かつての自分を知るものから見れば、
受け入れがたい裏切りに映るだろう……。

それでも、王は自分の選択を後悔はしなかった。

自分は王として一国を導く器ではなかった。
ならば、こうして洞穴の暗がりの中で
ゴブリンたちとまぐわっている方が、
よほど世のため、民のためでもあるだろう。

「ああ、幸せです……❤」

ただ自分の身体を求めるゴブリンたちに、
王は微笑みを向けた。

「ふぅー……❤ふぅー……❤」

出産の時が来た。
王はゴブリンたちの作った寝床に体を横たえ、
大きく股を広げて我が子が生まれるのを待つ。

既に最初の子の頭が見えていた。

みちぃ…♡

ゴブリンの赤子は小さく、同時に何体も孕む。
出産はそれほど苦労しなかった。
王は次々と、五体の子供を産み落とした。
ゴブリンたちは子供を抱え上げると、
王の乳房に吸い付かせて、赤子に初乳を
与えるのだった。

「私の、赤ちゃんたち……❤」

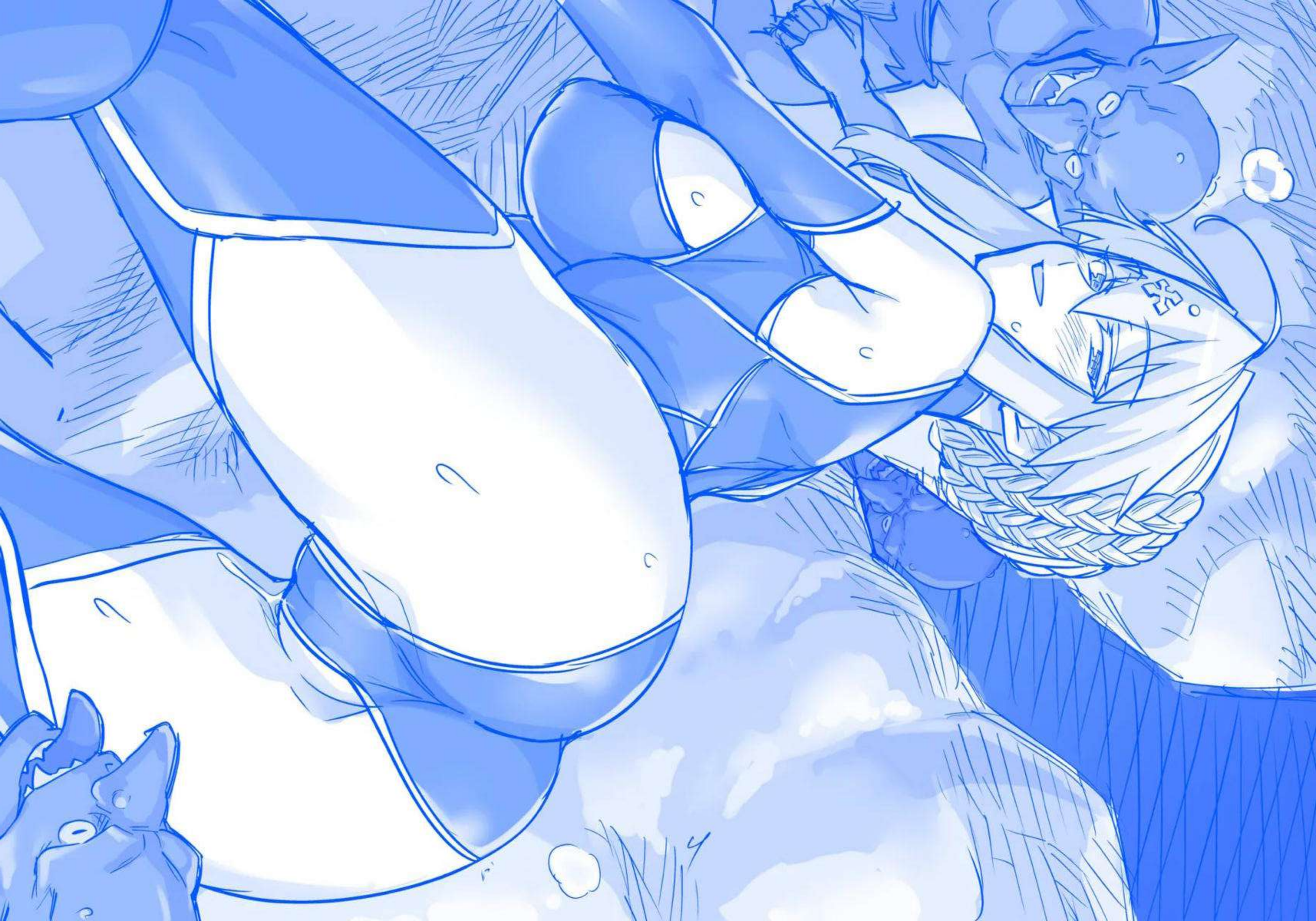
腹を痛めて子を産むとはこういうことか。
母になった王は、感慨深くゴブリンの赤子の
頭を優しくなでた。

王の謎の失踪から数年が経ち、
王国の混乱も落ち着いた頃――

一人の騎士は、森の奥深くで「それ」に出会った。
ゴブリンたちに守られる、金髪の妊婦……。
かつて失踪した王と瓜二つの女性だった。

彼女はゴブリンたちを「我が子たち」と呼び、
自分たちは静かに森の奥で暮らすので、
どうか見逃してほしいと言った。
さもなくば、貴公を討つしかない、とも。

騎士はかつての王の姿に、膝からくずおれると、
とめどなく涙を流した。
王はそんな騎士に寄り添うと、優しく手を取り、
我が王国の民を頼みます、と言って静かに微笑んだ。

騎士は森を去り、生涯このことを誰にも話さなかった。

いつしか、その森は「王の森」と呼ばれ、
そこに住む魔物は人を襲うことがなかったという。